天籟抄風

天籟松風

松村蓬麻著

自序

此新體詩集は、余が前年公にしたる桂花一枝後の作にして、先つ頃教育時論、東亞の光、南信新聞等に掲げしものを、今回吾松濤義塾々生の懇望によりて、世に公にすることゝはなしぬ、固より拙なき作にして、讀者の滿足を與ふるに足らざるべけれど、唯作者が理想の一面をだに看取せられなば、之に過ぎたる幸はあらじ、

明治四拾年拾月穀旦

著者識す

天籟松風目次

一、時……一
二、人の世……九
三、處世の歌……二四
四、仝　上……四二
五、秋風恨……五四
六、忠……六三
七、忍　耐……六五
八、自　重……七〇
九、修　學……七二
十、博　愛……七五
十一、あばれうき世……七七
十二、旅順口陷落の歌……八二
十三、流るゝ水……九一
十四、進取の歌……九七
十五、谿間の鶯……一〇八

天籟松風

時

松村蓬麻著

無限の過去を後にして、
無限の未來前に見て、
一歩一歩と足輕く、
「タイム（時間）」は現在と歩みつゝ。
やよや吾友「スペース（空間）」よ、
われ今汝に語りなむ、
汝なければ我もなく、
我しなければ汝なし。

我には不朽の力あり、
汝には不滅の命あり、
宇宙の母の情愛にて、
汝と我と親みし。

我ゆくところ汝あり、
汝がゐるところ我はゆく、
無限の宇宙に我と汝、
天の使命を歌はゞや。

我は無上の權者なり、
我ゆくところ君見ずや、
右に轉化れ手を擧げて、
左無窮の中を指し。

月日を移し星を變へ、
有情の地球を廻はしつゝ、
うゞろ浮世を觀下ろせば、
さて面白き浮世かな。

我ゆくところ君見ずや、
朝日のかげの昇るとき、
夕の雲の散れるとき、
移り流れてたえまなく。

頭上に輝く黄金の冠、
白露深き葎が宿、
いづれか浮世のものならぬ、
いかに轉化の早かりし。

譽よ富よ誰が爲ぞ、
幸よ不運よ誰が爲ぞ、
貧し賤しき憂き嘆き、
生死の絆、危しや。

笑ひ歡び樂みと、
怒り悲み苦みと、
うつろひゆける今そこに、
われ駸々と進むなり。

思の波の寄せきては、
いかに浮世のつらかりし、
詩人のあつき涙には、
戀てふものゝ宿れるを。

無常の嵐ふくからに、
あはれやはかな春の夢、
きえてあとなくなりぬるを、
誰ぞや現在に返すらむ。

現在の嵐叫べども、
見ぬ世の夢の懷かしや、
希望の光もたらして、
理想と我は進みゆく。

榮え衰へ又榮え、
興り亡びてきはみなく、
われ永劫と囁きつ、
たゞ滔々と過ぎ去りぬ。

わが身は横ふ古と今、
わが手は動く現在の中、
わが足は踏まむ未來の世、
あゝわが力ぞ限りなき。

人の世

神の慈愛はいと深く、
エデンの園よ春滿ちて、（エデン、の園は太古アダム、イブ、の住みし處、）
花かんばしく鳥歌ひ、
すや〳〵眠る幼子も、
浮世の嵐ふくまゝに、
あへなくさとる苦と樂と。

うき世の嵐吹く中に、
希望の光ほのみえて、
生ひ立つ乳兒のゆく末は、
いくろの艱み苦みぞ、
いくその笑ひ歡びぞ、
あゝかぎりなき人の世や。

雲むら〳〵とむら立ちて、
銀山崩る濤の底、
蛟龍潜み鰐躍り、
天地眞黑き海の上、
いづくをあてに進むらむ、
浮び漂ふ舟一葉。

劍の山に風起り、
千尋の壑に火は燃えて
荒鷲翔けり猛虎吼え、
前に攀づれば劍山、
後に落つれば千尋の壑、
こゝに佇む人もあり。

無明の闇は深うして、
瞋恚の炎熱うして、
奪ひ爭ひまた叫び、
優るを憎み威を畏れ、
疾にやつれ饑に泣き、
悶え苦む人もあり。

金紫の光よばゆく、
銀青の色てりそへ、
金殿玉楼春深く、
蘭麝のかをり管絃や、
功名富貴に誇りつゝ、
笑ひ樂む人もあり。

あしたの霞ゆふ紅葉、
指をりかぞふ春や秋、
賤が伏屋になどゐして、
親子よ兄弟、姉よ妹、
ふかきめぐみを神に謝し、
歌ひ歡ぶ人もあり。

濁世(だくせい)に塵(ちり)をよそにして、
月に嘯(うそぶ)き花に醉ひ、
あるは智識の鍵(かぎ)をもて、
宇宙の秘密(ひみつ)を開かんと、
すぎしをしのびうつゝを見、
きたるを想ふ人もあり。

そも人生のゆくへには、
さかまく大濤、けはしき山、
うらゝかの春、しづけき日、
憂、歡、苦と、
笑、悲、樂と、
かたみゝ移りゆくところ。

むかふは未來あとは過去、
躓き仆れまた進み、
あるひは光りまた暗く、
闇と光のめぐるなる、
無限の轉化かれに見て、
無限の思ひこゝにあり。

人生わづか五十年、
笑、歡、樂も、
憂、悲、苦も、
たゞ一場の歌舞伎ぞや、
至竟苦樂はみな人の、
心の中にあるぞかし。

榮華の夢のはかなきは、
覺めて黄粱一炊の、　盧生が邯鄲一炊の夢枕中記にあり
昔の譬へおもはえて、
頼む心のあさましや、
よしや劍れ山越すも、
さかまく濤に舟漕ぐも。

人生ためしこゝにあり、
わが光ある希望もて、
わが限りある力もて、
勉め勵みてたゆまずば、
水に溺れず火に焚けず、
なぞてかこたむ世の運命。

剛毅の劍を手にとりて、
懦弱の茨をきりひらき、
德のみ山にわけ入らば、
希望の光輝きて、
心の春は若うして、
世のむら雲はかききえむ。

仰げよ高き大空に、
すむ一輪の月かげは、
眞如の光ほのみせて、
あゝとこしへに笑ふごと、
あゝうるはしき希望もて、
人の心の安かれと。

處世の歌

碧澄みなす大空に、
曉の星二つ三つ、
いつしか光消えうせて、
東の方に靉ける、
紫雲の匂ひ麗はしく、
のぼる朝日のかげ清し。

老たる松のその枝に、
雨羽ひろげて荒鷲は、
そゞろに獨見おろせば、
萌ゆる緑の草けぶり、
百千の花の香を深み、
戯れ遊ぶ胡蝶あり。

荒鷲少し聲あげて、
やよ胡蝶子よきけよかし、
われ垂天の翼もて、
高く扶搖の風に搏ち、
朝た芙蓉の峯の上、
夕べヒマラヤ山の下。

疾風のゆくその如く、
大海を越へ山を越え、
千里萬里のゆきゝをも、
物の數ともおもはえず、
片羽搏てば地よ響き、
雨羽あぐれば雲のごと。

われ鳥中の王ゝして、
一たび怒れば鳥怖れ、
一たび搏てば獸仆る、
強き弱きのけぢめなく、
攫奪搏噬思ふこと、
肉を引裂き血に飽きぬ。

われに爪あり翼あり、
われに鋭き嘴もあり、
われは恐れじ吾世界、
あゝ今汝の哀れさよ、
嵐に碎け雨に散り、
名もなき野邊に朽つべきを。

胡蝶は頭をふるひつゝ、
獨りほゝゑみいひけらく、
あゝ鷲君のうたてさよ、
汝の翼とその爪と、
汝の鋭きその嘴と、
みな煩の種ぞかし。

黑雲起り嵐ふき、
天に日かげの見えぬ時、
汝の翼、用もなく、
疲れし身躰の休むとき、
汝が爪嘴何かせむ、
そこ銃丸の虞れあり。

強きが上には強きあり、
力の上には力あり、
強きは力弱くして、
弱きは力強からむ、
天それこゝに鑑みて、
れの〳〵性を賦せしぞや。

われ悲なゞ吾身をば、
嵐は叫び雨は飛び、
花はしほたれ香はきゆも、
無常は我と諭すべく、
轉化は我に敎ふべく、
又すゝみなむあすの春。

われ悲まじ羨まじ、
朝た夕べのその中も、
ふく春風に誘れはて、
霞の紫衣とし、
草の緑を茵とし、
百、千の花の香に醉ひぬ。

われ悲まじわれ知らじ、
天の惠を身に稟けて、
栩々として飛ぶ花の影、
恍然舞ひ入る周の夢、　莊周。
浮べる生も休む死も、
うつろふ時もゆく雲も。

けふの一日も花の野邊、
あすの一日も花の野邊、
うすき羽の上へ春風に、
希望の光を湛へつゝ、
ゆるき小川の岸の邊に、
心の渴きいやしつゝ。

たゞわが心のゆくまゝに、
おのが務をつくしつゝ、
いくそのともとうちむれて、
生ては遊ばむ花の野邊、
死してはうもれむ花の野邊、
あゝ吾幸の多き哉。

人世鷲に似たらずや、
驕れる者と誇れると、
富よ力よ譽よと、
強は弱を虐げて、
互に攫み奪ひなば、
爭ひつねに絶えざらむ。

人生蝶を思はずや、
小さきものもはかなきも、
弱きも脆きも貧きも、
天の恩惠を感謝して、
れのが務をつくしなば、
心はとはに春ならむ。

大なる哉昊天や、
萬物性を天に稟け、
みな其性のそのまゝに、
生々として生ひ出でつ、
潑々として躍りつゝ、
自然のにほひかはりなし。

わが平等の波をもて、
時間空間捲き去らば、
大小强弱けぢめなく、
貧富榮辱分ちなく、
理想の岸に到るべく、
眞我の光あらはれむ。

處世の歌

希望の光ほのみえて、
浮世の海にこぎいでし、
あないさましきわが子等よ、
浮世の海は風荒く、
浮世の海は波高く、
浮きつ沈みつゆく末は、
いかなる岸に到るらむ、
あゝ心せよ舟人よ。

うき世の空はかき曇り、
涙の雨はしげくして、
怒る苦海の浪の音、
寄せて碎けて又かへし、
のどけき日和なれば、
歌ひ歡びいくたびぞ、
笑ひ樂みいくたびか、
あゝ心せよ舟人よ。

そも人生のゆくへには、
むらがる雲の飛ぶごとく、
忽ち曇り又はでり、
あるひは光りて又暗く、
きのふの歌ひ歡びは、
けふの悲みやどすべく、
けふの苦みかず〳〵は、
あすの樂みやどすらむ。

憂、悲、歡と、
笑、樂、苦と、
流轉の波はしきりにて、
よせてはかへし又よせて、
めぐり〳〵てたえまなく、
うつろひゆけるさまみれば、
あゝわがすめるうつし世に、
分ち難しや苦と樂と。

富よ譽よ力よと、
うれしき事の長かれと、
願ひは同じみな人の、
心の中にあるなれど、
一たび得れば氣はゆるみ、
なまけ怠りすざむ間に、
あはれや夢とかき消えて、
あへなくかはる貧と苦と。

懶惰安逸その果は、
身をも家をも毒すべく、
薄志弱行その害は、
希望も事も破るべく、
懼れ驚き憂き艱み、
惡み怒りて又恨み、
悶え苦み泣き叫び、
爭ひつねに絶えざらむ。

もゝとせちとせ夢のごと、
夢とすぎゆく人の世の、
はかなき榮華あとなくて、
浮ぶ泡沫そのはてや、
人の齡の傾くは、
夕〻の西に落つるごと、
あゝわがあらゆる力もて、
そをひきとめん術ぞなき。

されど人々心せよ、
世はいやましに進みつゝ、
生くるを競ふ人の聲、
わが限りある命もて、
わが限りなき希望あり、
わが限りなき希望もて、
わが一生をれもはえば、
あゝわがためしれもしろや。

浮世の風は荒くとも、
浮世の波は高くとも、
あゝ吾剛毅のその心、
もゝちの艱みに鍛ふべく、
あゝ吾不屈のその力、
よろづの事に堪ふるべく、
あゝ吾希望のその光、
めざす岸邊に到るべし。

たゞ吾處世の樂は、
いくそのにがきうきなやみ、
いくそのなげきかなしみを、
堪へつ忍びつとこしへに、
勤苦の二字を手に握り、
儉素の二字を心して、
勤め勵みて進みなば、
富も譽も何かあらむ。

月日のめぐりたえまなく、
つみなす思ひいやましぬ、
怨みかこたじ世の運命、
無限の未來かれにみて、
今吾力こゝにあり、
剛毅の心不屈の氣、
勤苦儉素の鍵をもて、
寶の門を開きなば、
希望の光かゞやきて、
まことの德こそあらはるれ。

智識よ德よ善よ美よ、
あゝ吾理想のあらはれて、
限りなき世のなつかしや、
愛よ誠よ禮よ義よ、
平和をつなぐ綱のごと、
歌ひ歡び治まりて、
人と人とのまじらひも、
まどかにいとゞあたゝかく、
とはに幸福多くして、
心の春ぞのぞけしや。

秋風恨

秋風さむくさ夜ふけて、
草蟲なくや窓の下、
深き嘆きに沈みつゝ、
心の闇路ふみ迷ふ。

折しも清き月かげは、
皎々として澄みわたる、
ちゝよ碎くる胸の裏、
光くまなく照されぬ。

玉なす涙掩ひかね、
瑟の調べもたえ〳〵に、
いかにうき世をはかなみて、
姫は夢路を辿るらむ。

死に瀕したる戀詩人、
髪蓬々とかき亂れ、
秋の蓬と枯れつれど、
眼にしたゝるは愛の涙。

病みほそりたる手をのばし、
姫を招きて語るらく、
世にもまれなるうるはしの、
君がなさけは玉のごと。

巫山の雲に世を誣ひて、
はかなき戀にゑむ者を、
君が誠にくらぶれば、
粧ふ骸にことならず。

愛には自然の涙あり、
愛には自然の光あり、
あゝ神聖のその愛は、
造化の神のみのりぞや。

吾一生の幸福は、
世のうきふしをよそゝして、
きよくけだかき其愛を、
ともに歌ひていざゆかむ。

世の炎涼はしきりにて、
人の心は浮き雲よ、
春の桃李はめでらるも、
秋の扇はすてられむ。

御身のゆかしきそのまこと、
なぞて此世に忘るべき、
心の錦かくばしく、
ともに歌ひていざゆかむ。

涙にくもる姫が胸、
詩人の言に照されて、
芙蓉の花の顔も、
月の光りぞてりそふる。

天女のならす琴の音は、
君と妾の胸の中、
不老の春のみ園生に、
永き月日を歌ひてよ。

浮世の塵をへだてたる、
ところの春は若うして、
流るゝ霞、花の香や、
もゝ鳥歌ふ愛の歌。

時のかよひぢあらざれば、
こしかたゆくへ跡なくて、
たゞうつし世のまゝよして、
かはらじ死なじ君と妾。

天邊高く聲すみて、
鳴く雁に驚けば、
悲しや一場の夢きえて、
詩人は黄泉の人なりき。

姫は悽然うちしほれ、
またもや憂きにふし沈む、
嗚呼戀人の世にまさば、
ともに語りて歌ひなむ、
にほひゆかしき言の葉に、
闇の嵐の悲しさよ。

あはれうき世のはかなきは、
草葉の露にたとふらむ、
秋風さむく身にしみて、
夜は深深とふけわたり、
月は琴書を照しつゝ、
長き恨は盡るまじ。

忠

天には輝く日と月と、
我には燃ゆるたゞ誠、
われのが誠の一心は、
岩をも金をも透すべし。

君にさゝげむこの心、
國に盡さむこの心、
家にありても忘れじな、
人にむかひて缺きはせじ

つとめよわざにいそしみて、
なべてひとしく忠なれや、
あゝこの忠の一字こそ
遠き昔も今もなほ。

我日の本の國民の、
かはらぬ誠の道にして、
ひとり世界よ秀でたる、
國の精華と知らるなれ、
踐めやもろ人この道を。

忍耐

千里の路も一歩が始め、
大河の水も雨滴が本よ、
その源はさゝやかにして
岩が根くゞりゆき〳〵ものも、
末はよひろくなほまた遠し。

人生ゆくへあゝ、君見ずや、
左よ波風追ひせまりつゝ、
右にけはしき峯をたつゞく、
逆巻く浪よ舟こぐべきか、
あるは劍の峯こすべきか。

成功の二字冠にして、
希望の光、前にぞあれば、
寒素に磨けわが胸の玉、
辛苦に鍛へ鐵石心を、
いくその艱み何かあらむ。

剛毅の劍わが手にとりて、
路に當れる懦弱の茨を、
斬つてひらいて撓まず倦まず、
寶のみ山に分けてぞ入れば、
そゞろ心の春こそにほへ。

仰げよ高きその大空に、
眞如の月のたゞはゝゑむを、
あゝいさましきわが忍耐よ、
いましが幸はこれとこしへに、
安く樂しくまた尊しや。

自重

勢威に怖れ富をこひ、
わが膝を折り頭さげ、
人を頼むなたよらじな。

われには自重の心あり、
われには自由の光あり、
われには不屈の力あり。

たゞわが不屈の力もて、
心に磨く自重の玉、
自由の光を放ちてむ。

修學

學びの窓にうちつどひ、
もゝちの文を繙きつゝ、
みぬ世の人を友として、
すぎしをしのび、うつゝをみ、
きたるを想ふ樂しさよ。

學びの海は廣うして、
ゆけども〳〵限りなく、
めざす岸邊はいづくぞや、
誰か智識の鍵をもて、
宇宙の秘密を開くらむ。

月日のめぐり絶えまなし、
つとめはげみてたゆまねば、
智識は深き淵をなし、
德器は成りて山のごと、
あゝ、吾理想のあらはれて、
光にほはむ眞、善、美。

博愛

國の東にまたは西、
人の習俗ことなりて、
貧き者と富める身と、
高き卑きの差はあれど。
われのが眞心うちひらき、
ともに手をとりほゝゑみつ、
まどかにあつくまじらひて、
平和の幸を望まばや。

わが平等の愛をもて、
人の心に分ちなば、
驕り誇れる者もなく、
嘆き悲む聲もせじ。

幾億万の人の子が、
歌ひ悅びいや榮え、
互にかはすその情愛、
誠や愛は人の道。

あはれうき世

もゆるあはれもしらぬ火の、
心づくしのうき思ひ、
石になつたるさよ姫の、
その古ぞしのばるゝ。

夕の空はかきくもり
悲しき風のふくまゝに、
涙の雨は篠をつき、
心のやみははれやらず、

波、風、あらき此の浮世、
因果の流轉しきりにて、
戀の手綱のきれやすく、
心の駒ぞ狂ふなる。

夢かうつゝかまぼろしか、
迷の海の底ふかく、
落ち入る如き心地して、
いかでか生きむ此の苦界。

ゆるさせたまへや吾罪を、
ゆはれみたまへや吾心、
神も佛もなきゆゑに、
かくはなさけのつめたきか。

呼べど叫べど答へなく、
泣けど咽べど助けなく、
松ふく嵐にさそはれて、
すだきなげくは野邊の蟲。

嗟、玉の緒もたえ〳〵に、
きゆる思は白露の、
はかなき夢の一世かと、
無常のあはれぞしられける。

寂然ひゞく鐘の音に、
うき世の夢は破られぬ、
迷の雲はかき消えて、
悲苦哀傷やさりにけむ。

眞如の月は大空に、
十方世界をてらしつゝ、
彼方におこる天の樂、
遠くかすかにきこゆなり。

あはれ苦樂はみな人の、
心の中にあるなれば、
差別をすて、平等の、
眞如の境に遊びなむ。

旅順口陥落の歌

うづなく烟、日を包み、
黯澹の色ものすごく、
闇を縫ひて紫電閃めき、
砲聲万雷の如く山岳をゆる。

吶喊の聲山を拔き海を飜へし、
二百三高地は吾手に落ち、
舊市街、新市街、
旅順の全景眼下にあり。

猛火は天を焦し、
水烟海を蔽ひ、
血肉亂れ飛びて、
醒風鼻を掠む。

殘りの艦は皆沈み、
巨彈は雨と飛びかひて、
二龍山、松樹山、
爆然ひゞき陷りぬ。

山河の形うつろひて、
壘は碎け壁破れ、
彈藥はつき糧つきて、
疾に惱み創に叫ぶ。

白烟うすくたちのぼり、
旅順の運命こゝにつき、
明治三十八年一月二日、
白旗を掲げ城を開く。

十有餘年のその間、
力と金とを傾けし、
あゝ東洋に比ひなき、
山河の固め金城に、
數月の間さゝへえし、
スラブが死力も今折れぬ。

おもへば昔、遼東に、
彼が爪牙を磨ぎしとき、
平和の名を藉り非義の慾、
はしなくつかむ此要地、
あゝ、神怒り、人憎み、
千秋の恨忘れむや。

山河はすでにふりぬれど、
碧血今は腥く、
東洋平和の爲め、
世界人道の爲め、
弱を助けて無辜の民を救ひ、
我正義の劒を彼が頭に加ふ。

正義はなべてとことはに、
許多(いつはり)くうつりゆく、
人の世界に輝ける、
ひとり不滅の天の道、
驕(おご)れる者も傲(ほこ)れるも、
無道(だう)の者も末つひに、
正義の前にはひれふさむ。

千秋の恨けふはれぬ、
見よや旅順口頭に、
我陸海の三軍の、
高く捧(さ)げし其み旗、
旭の光麗(うる)はしく、
きらめきうつるそのかげは、
新(あらた)の春のおもかげか。

波は洋々として我艦を浮べ、
山は青々として我軍を迎ふ、
歡呼の響、海に湧き、
祝賀の聲は山に鳴る、
あゝ、我偉勳は無窮にてりて、
いつれの世にか忘られむ、
〳〵。

流るゝ、水
花さく野邊をめぐりゆく、
いざ、小川の水ゆるく、
小さき波の聲あげて、
そゞろにひとり囁きつ。

あゝ、わが自然の友どちよ、
わがおひたちを君見ずや、
夕べみ山の岩のいほ、
雲の涙の一雫。

けさわが友とうちつどひ、
樹の根をくゞり岩をよけ、
千尋の谷にさゝやひつ、
奔り流れて野に出でぬ。

我ゆくところ君見ずや、
柳の緑深ふして、
花は霞に包まれぬ、
啼く鶯の聲清み、
胡蝶は花にあこがれぬ。

我ゆくところ君見ずや、
千草の緑うちけぶり、
風暖き春の野邊、
自然の調べおもしろく、
み空に歌ふ夕雲雀。

我ゆくところ君見ずや、
夕べの空の色あせて、
朧ろに霞む春の夜の、
月の光のうつくしく、
星のまぶしのなつかしや。

我ゆくところ君見ずや、
飛ぶ一輪の花の色、
春のみ影を浮べつゝ、
うつり〳〵てきはみなく、
流れ〳〵てたえまなく。
我ゆくところ君見ずや、
晝夜をわかず進みつゝ、
末はまた廣き河となり、
千里の流れ滔々と、
かぎりもあらぬ海に入る。

我ゆくところ君見ずや、
けさ蒼海の波の面、
百千の船を浮ぶべく、
くれ大空の雲となり、
西に東に雨と飛ぶ。
我ゆくところ君見ずや、
元のみ山の岩のいほ、
一夜のやどりやすらかに、
雲の涙の一雫。
つゞひ流れて世にいづる。

あゝ我無窮を君見ずや、
いざさ小川の水なれど、
流れ〳〵て絶えまなく、
小さき波の聲あげて、
清くさゞらぐ天の歌。

進取の歌

強きは勝ちていや榮え、
弱きは敗れてあともなく、
適へるものはながらへて、
適はぬものは滅ぶべく。
進めば常に功を成し、
退けばつひ敗るなり、
成敗はやく定まりぬ、
こはこれ自然の道にして。

一歩を進むはわがゆくぞ、
一歩を退くはわがのくぞ、
進むも退くも我にあり、
油斷ななせぞ人々よ。

國の東に又は西、
いにし昔も今の世も、
世に豪傑と呼ばれしは、
すべて進取の人なるぞ。

寒素に磨くこの心、
辛苦に鍛ふこの腕、
百折たわまぬ其力、
岩をも透す其誠。

勉め〳〵てたゆみなく、
勵み〳〵てたえまなく、
希望を達し進みゆく、
その精力ぞたふとしや。

いかに天才ありとても、
それを頼みて誇りなば、
弱き心の末つひに、
希望も事も破るらむ。

いかに財寶ありとても、
奢の心、起りなば、
なまけたたりそのはては、
身をも家をも毒すべし。

あ、恐るべし弱き意志、
あ、戒めよ怠慢を、
因循にして卑屈こそ、
なべて進取の敵とし れ。

われも人なり彼も人、
彼よくなさばわれもせむ、
後れ先つ時あれど、
など豪傑に劣るべき。

見よや世界のその廣き、
智識の日々に進めるは、
新の潮の寄するごと、
希望の光みちぬ。

立てよ有爲の少年よ、
進めよ有爲の少年よ、
百難前に當るとも、
千苦は後に逼るとも。

是れ吾力をためすとき、
是れ吾心を錬れるとき、
百難千苦何物ぞ、
人生ためし面白や、

進みて取れや新智識、
進みて向へ目的地、
德義を修めて過たず、
正しき道をふみてゆけ。

事に臨みて勇健に、
事に當りて堅忍に、
熱心にして勤勉は、
これみな功を成せる道。

才に誇らず高ぶらず、
快活にしていさぎよく、
獨立の氣を養ひて、
決して人にたよるなじ。

前途は遠く限なし、
吾責多く任重し、
小しの功に安むせず、
つとめはげみて怠るな。

千里の道も一歩より、
大河の水も雨滴より、
その源はさゝやかに、
末はまた廣く又遠し。

流るゝ水のその如く、
晝夜をわかずすゝみなば、
いくその功を積み成して、
あらたの希望輝かむ。

希望の上には希望あり、
力の上には力あり、
一事を成せば又一事、
かくぞ競ひてきはみなく、

吾一生の精神の、
たゆまぬ力のそれをもて、
おのが事業に傾(かたぶ)けて、
御(み)國に盡せ世に盡せ。

谿間の鶯

谿間の邊うら〳〵と、
ふくる曙いろみえて、
流るゝ霞、花の雲、
匂ふ紅紫の千枝の春。

花より花に飛びかひて、
歌ふ綿蠻一曲の、
聲や樂土にはふなる、
迦陵頻伽のそれならむ。

天津乙女の舞もよく、
袖うちかはすたびごとに、
艶に妙なる清調は、
霞の中より漏れいづる。

自然の幸を稟けし身は、
ゑふてとこしへ歌ふらむ、
今日の一日も花の香に、
明日の一日も花の香に。

花幾時かにほふべき、
春幾時か榮ゆべき、
夕日にうつる谿の色、
烟の末もうすうして。

われ万朶の花吹雪、
水面に亂れ狂ひつゝ、
春のおもかげはかなくも、
青葉がくれに流れゆく。

青葉の影に宿しめて、
聲もそゞろに老にたれ、
暮れゆく春の名殘をと、
歌ふ一節おもしろや。

覺めよ快樂のその夢を、
黄金の樓屋、玉の臺、
繁華の春に美を競ひ、
譽に醉ふも一時や。

よしや快樂のとはならば、
涙の川は涸くべく、
憂の山は崩るべく、
世の味を誰ぞ知らむ。

涙の川の深からば、
紫邸の光世にうせじ、
憂の山の高からば、
リーズ、の流れ世にあらむ。

なべて苦樂はうつし世を、
色どるはえと君しらば、
いまわが歌ふ一節に、
無限の思ひなからむや。

くれゆく春の靄深く、
流る、水の韵高く、
ちりゆく花の影遠く、
老の調べのいと清く。

自註、迦陵頻伽は極樂淨土に住める美音の鳥、紫邱の光はホルランド、の文中パープリング、ヒルス、オブ、グレイト、デライト、を譯したるものにて即ち歡喜滿足を得たる人生得意の境、

リーズ、の水は忘川と譯す冥府にありて此を飲めば過去一切の憂を忘るゝと云ふ、

不許複製

明治四拾年拾月廿五日印刷
仝　年十一月三日發行
天籟松風奥附
〔定價貳拾五錢〕

著作者　長野縣下伊那郡松尾村四拾五番地　松村正一
發行者　仝縣仝郡飯田町九百五番地　小池勘次郎
印刷者　仝縣仝郡飯田町六五八番地　原上四郎
印刷所　仝縣仝郡仝町千拾壹番地　發光堂
發行所　仝縣仝郡仝町九百〇五番地　松濤義塾
仝　西澤書肆支店